

令和 3 年度 第 3 回 大阪府立茨田高等学校 学校運営協議会 （議事録）

令和 4 年 1 月 27 日（木）15:30～

大阪府立茨田高等学校 会議室

出席者（敬称略）：藤原・山下・松井・西本・笠松(初任者)・山村(初任者)

川村・渡邊・綿世・中出（協議委員）

【欠席者】…早坂・寺野（協議委員）

記録：西本

1. 挨拶

2. 茨田高校より

本校教育の現状について

* 令和 3 年度学校経営計画の進捗について

生徒指導に関して、生徒・保護者の納得感を得ることに苦慮している。教員は思いを持ってやっているが、伝わっていない部分がある。

進級率の向上について、なんとか進級率を上げる取り組みを実施していきたい。ICT 端末の活用については、大きく進んでいる。

現状進路未決定者が 10%を超えてしまっている。なんとか進路未決定者が少なくなるような取り組みが必要だと考えている。

部活動の入部率は 22.8%（兼部含む）。年度当初の新入生勧誘活動ができなかったことで、部活動とつながるきっかけを失ったようである。茨田高校フェスティバルは昨年に引き続き今年も中止となった。

地域連携の推進においては、新型コロナの関係で、全く取り組みを進められなかった。新型コロナの終息後にはしっかりとした取り組みができるようにしたい。

* 令和 4 年度学校経営計画について

安心安全な学校づくりのために、災害・感染症などに対する危機管理意識を高める取り組みを行っていく。

学校広報がなくなったが、その力を地域連携活動に注ぎ、地域活動の方々への恩返しをと考えている。また、これまでの学校広報を、在校生の様子を中学校に発信しながら入学生を育てていくことに力を向けていく。特に、中途退学・転学防止の取り組みが必要だと考えている。

*** 学校教育自己診断の結果について**

【生徒回答の分析】

「担任は相談や悩みに応じてくれる」や学校の指導への納得感などの項目が下落している。友人トラブル等が多く発生したことが影響した側面もあるのか。

修学旅行については、やはり生徒は楽しみにしている結果になっている。コロナの終息でなんとか沖縄へ行くことができればと考えている。

学校へ行くのが楽しい、授業はわかりやすく楽しいなどの項目が上昇しており、学校生活の中での教員の声掛けや、授業の工夫などが功を奏しているのではないかと感じる。

【保護者回答の分析】

学校への信頼感の部分で下落がみられる。納得のいく指導や説明が不十分だと感じられている。地域連携・災害対策・学校施設に関しても前年度マイナスの結果である。情報提供が不足しているのではないかと感じる。

新型コロナ関係で満足に開催できていない状況もあり、学校行事について肯定的な印象をもってもらえているかも重要なところ。

【教員回答の分析】

「カウンセリングマインドを取り入れた生徒指導を行っている。」項目でマイナスの結果。友人トラブルへの関りや生徒指導での関りにおいて、下落する要因があったと考え改善へ向けて取り組む必要がある。

授業の工夫・評価の方法・ICTの活用については、教員間でも情報共有が活発である。幸いに予算内で教員にも一台ずつ端末を支給でき、積極的に授業で活用する教員が多くいる。

*** 授業アンケートの結果について**

経年で比べると、大きな上下は見られない。アンケートの母数が少ないことから、数値をどう分析するかがかなり難しくなっている。生徒のニーズを汲みながら、教員の授業工夫に生かしていきたい。

*** いじめアンケートの結果について**

教員が把握していない情報もキャッチできていた点では有用にはたらいだが、逆にいうと安心して教職員に相談できていない現実も真摯に受け止めなければならない。

<休憩>

3. 協議

(議長)

茨田高校が来年度の募集を最後に、生徒の募集を終えることも踏まえて、委員の皆さんが気づいたところについてご意見をお願いします。

(協議委員)

地域として関わるものとしては、生徒が学校で生き生きと過ごしてもらえることを望んでいる。生徒が、学校が楽しくなるような授業をやってあげてほしい。地域行事をしていく中で、やはり生徒の姿を見たい気持ちがある。コロナ終息が待ち遠しい。

(協議委員)

コロナで休校になって生徒がオンライン授業をやっている様子を見ていたが、なかなか慣れない様子だった。端末の使用などがわかりやすくできればいいと思った。

(協議委員)

指導の納得感について、生徒に指導を納得させることが最優先であることは明らかで、やっていただいていると思うが、若い教員の経験の少なさをしっかりとカバーする体制が必要。人間は感情の生き物だから、言葉がけひとつが重要になる。生徒に対しての指導の流れや意義を確認することでも変わってくるのではないか。どこでも同じような課題がある。

生徒の指導を福祉の面からみると、例えば、頭髪指導は学校に入れ込んで対応する指導であるべきではないか。ただ単に線引きをきちっとするだけでなく、納得と合意を形成するプロセスを進めていくことが重要になってくる。

(初任者)

自信がない生徒がとても多い印象。授業でも発問に返答がなかなか出ない。生徒の自信を育むにはどのような授業活動が必要なのかフィットするのかを日々悩んでいる。

(初任者)

集団生活として守るべきルールや考えを理解させることの難しさ、生徒を叱る難しさを痛感している。

(協議委員)

「入学してきた生徒を大切にしていく」という、教員が出身中学校へ出向き情報を伝える取り組みは、非常に重要だ。問題行動をする生徒には必ず背景がある。その背景をどのようにキャッチするのかが問われる。ぜひとも子どもたちから逃げないで対峙してやってほしい。

教員回答について、学校教育自己診断の生徒との対話に必要な項目は100%を目指さなければならない。教員の生徒対応体制についてなど数値の変化が問題なのではなく、100%を目指して具体的な取り組みをつくる必要がある。

(協議委員)

発言できない生徒への授業についてヒントを得るには、小学校をみるとよくわかると思う。意識的に小学校の授業見学へ行ってみてはどうか。

生徒指導について、原点と考えられるのは「愛情不足」なのではないか。生徒自身をいかにクールダウンさせるかの指導工夫が、高校ではなかなか学べない。茨田高校の先生方は若い方が多いので、若くてエネルギーがあるうちに、いろいろな課題を抱えた生徒への対応を学んでほしい。

4. 謝辞